

# 幻滅の時代と宗教

安富信哉

## 一 幻想の崩壊

### 〈倒〉から〈壊〉へ

今、私たちはさまざまな神話、ファンタジーがどんどん崩れていっている時代に生きているのではないでしようか。バブルが崩壊してから七年ほどたっていますが、その間、さまざまなことが起こっております。銀行が倒れたり、証券会社が倒れたりする。有名人の離婚などにも分るように、私たちが絵に画いたような理想としている家庭が崩れていっている。日本の官僚たち、これほど優秀な官僚は世界にいないとこれまで言っていたのですが、さまざまな不祥

事を起こしてしまっている。戦後、さまざまな神話が築き上げられてきたわけですが、ここ数年の間にどんどん崩れてしまっている。そういう状況に立ち至っているように思います。

今年のお正月、ニュースキャスターの筑紫哲也さんとジャーナリストの立花隆さんがテレビの対談で話していた中で、筑紫さんが去年の日本のキーワードは「倒」であったけれど、今年は「壊」であるとおっしゃっていたことが思い出されます。企業の倒産が昨年はどんどん起っていましたが、いまでは壊れるところにきてる。日産生命、三洋証券、北海道拓殖銀行、山一証券という大きな企業の金融破綻が続いたわけです。これについて経済評論家の内橋克人さんは、日本は長く培ってきた文化も含めて人々に碎け散らうとしているのではないか、と『文藝春秋』の中で書いていたことを思い起します。

確かにさまざまなる崩壊現象が、殊にこのところ立てつづけに起こっております。それは単に、対岸の火事ではなく、やがて私自身の身の上にも崩壊が起こるのではないかという現実性がございます。

私は、大谷大学に勤めていますが、奨学金を申し込む学生たちの応募の理由を聞いていますと、銀行との関係がだめになつて家の仕事が行き詰まつてしまつた、これ以上学業を続けるの

## 幻滅の時代と宗教

が大変なので奨学金に応募しましたという学生が目立ちました。お父さんがリストラで会社を休んで、経済的に難しくなっていることを一つの理由として上げている学生もいました。

また今回のサッカーのワールドカップへの日本出場を見てもわかりますが、応援にあれだけたくさんの方者たちが行つてゐる。これだけお金に余裕のある人がいるのだから、日本の経済は大丈夫なように一見して見えるわけですが、しかし、大きな目で見ますと、日本という国はタイタニック号が沈んでいくような落日の状況に差しかかつてゐるのではないかという気が致します。

そういう大人の状況に比べて、子どもたちはどうか。子どもたちの世界の中でも大変なことが起つてゐることはご承知の通りでございます。私たち心痛むことなく思い出すことができない神戸の少年殺害事件、酒鬼薔薇聖斗というペンネームで自分のことを表してゐる少年による事件ですが、表面的には特殊な例に見えるのであります。しかし、日本の状況がああいうような人格破壊を生み出したのではないかと思わざるを得ません。

最近、「キレる」という言葉が流行つております。子どもたちの中で自分の思い通りにいかないとキレてしまう。そして刃物を振り回して最悪の場合は先生を殺害するといふところまで

進んでしまう。そういう事件も起こっています。また、自分の欲しいものを手に入れるために、何の罪悪感もないままに売春行為に走る少女たちも少なくないと報道で伝えられています。今、子どもたちの中には、今、ここだけよければいいという刹那主義が広がっているように思います。すぐ暴力に走つてしまったり、自分が欲しいものを手に入れるために、一昔前までは考えられないことに手を出す子どもたちが増えている。そういうことから、政府の教育関係審議会では「心の教育」が必要だと答申されている。しかし、当座的な「心の教育」では、とても今の子どもたちの心の荒廃、あり方を癒していくことはできないだろうかと思ひます。

### 豊太閤秀吉の悲劇

特に、バブルが炸けた後、まるでシャボン玉が炸けるように次々と夢が消えていくております。私たちはバラ色の夢をいくつか見てきたわけですが、バラ色の夢が泡沫のように消えて、今、冷たい現実に目を開かされるということが少なくございません。そういう栄耀栄華が消えていく現代の姿を見ておりますと、丁度四百年前に、豊臣秀吉がむさぼった栄華の夢が思い起

## 幻滅の時代と宗教

こされます。

慶長三（一五九八）年三月、秀吉は醍醐で豪華な花見の宴を開いています。植えた桜が七百本、三宝院の庭園に滝を作つて八つの茶屋を作りました。九百人の客を招いたそうです。その時、秀吉は六三歳、華美を極めた宴であったと言われております。ところが五ヶ月たち、秀吉は大変な病氣に苦しめられて、死に直面した。

つゆとおち

つゆときへにしわが身かな

なにわの事も夢のまた夢

こういう辞世の句を残しております。あれだけ栄耀栄華を極めたんですが、死の床について秀吉がこういう歌を残しています。病に臥せりながら何を思ったのか。農民の中から身を興して出世に出世を重ねた。朝鮮に侵略して、朝鮮の人々の耳や鼻を削いで塩漬けにして送らせて、戦利品として確かめたと伝えられております。そういう権勢の極みに達した。しかしそういう一生のことが走馬灯のように彼の脳裏をくぐつて蘇ってきたということです。それが全く夢であつたというように、なにわの事も夢のまた夢といつてゐる。どんなに栄耀栄華を極めても最

後は夢のまた夢ということで一生を終えていった。秀吉にしてそうだったのかと思います。

今年は豊太閤没後四百年ということで、京都文化会館でもそれを記念した催し物が開かれています。秀吉の栄華の夢が幻のように消えていったことを思いますと、私たち日本人は今、太閤秀吉のような苦い現実の中に投げ出されているのではないかと思うわけです。ついこの間のワールドカップの三連敗を見ておりましても、夢が消えて世界の厳しい現実をかいま見たような気がします。そういう現実に直面している。しかし私たちは本当に現実というものを見つめることができれば、新しく出発することができると思うんです。

## 二 幻滅の彼方に

### 宗教の誘惑

ところが、現実に破れて逃避主義に入つて、もう一つ別な夢を見ようとする場合がございます。人によつてもさまざままでござります。男の人の方が女人より夢を見る度合いが強いのではないかと思いますが、夢を失つて、別な夢を見ようとする。これが人間というものかもしれません

## 幻滅の時代と宗教

ません。

つい四、五日前、私の知っているある若者が飛び下り自殺をしました。幻覚も出ていたということです。その人は、普段、映画にのめり込んで、ハリウッドの映画は何でも知っている、そういう人でした。しかし現実の世界が映画の世界に重なっている。現実を見たくない。映画だけに浸っている。自分の内部世界に閉じこもって外を遮断する。その結果の悲劇でした。バーチャル・リアリティと言われますが、その中に入ってしまつてしまつ。現実と幻想の世界の境界線がだんだんとぼやけてしまつて、現実を幻想と思う。幻想を現実と思うようになつてしまつ。そういうことは、いまの若者にもしばしば起つております。

受験戦争とか友だちのいじめにあつて、現実の世界が嫌だとなりますと、自分の部屋に閉じこもつて夢ばかり見るようになることが少年たちの間に起ります。それと同じように、現実に絶望した人たちが宗教によつて夢を見ようとする場合が出てくる。カルト宗教がござります。皆さん方、よくご存じだと思いますが、閉鎖的な宗教集団です。そこに教祖と言われるカリスマがおりまして、神秘的な体験を説く。その人は神秘的な体験を得て閉鎖的な宗教集団を引っ張つていきます。そういう中で、世の中は終わりだという終末論の立場に立つて、自分たちだ

けが救われるという幻想を抱くわけです。

身近な例で申しますと、地下鉄サリン事件を起こしたオウム真理教の人たちは、教祖が見せる幻想に酔つてしまつたわけです。そういう時、宗教集団は幻想共同体になつてしまつ。最近、元オウム真理教の信者の一人がある雑誌で、地下鉄サリン事件に加わつていた自分の心のプロセスを手記として載せています。オウム事件では多くの人たちが、しかも高学歴の若者たちがオウム真理教に入ったということで大きな衝撃を受けました。東京大学、京都大学、早稲田大学、林郁夫被告は慶應大学医学部出身です。社会に出ていけばエリートであるはずなのに、どうしてあのような破壊的なカルト宗教に走つていったのか。入信した彼らには、現実の世の中に対する大きな絶望があつたわけです。世の中の現実に絶望した人たちに対し尊師と崇拜された麻原彰晃が幻想を吹き込んだ。たとえば空中浮遊、空を飛ぶという幻想やハルマゲドンという幻想を振りました。

宗教はある場合には、現実世界に絶望した人々に新手の夢を見せようと致します。人類が始まつて以来、宗教は現実に疲れた人々に対して幻想によって新しい夢を与えてきたということもできます。疑似宗教の持つ大きな役割がそういうところにあると思います。いつまでも長生

## 幻滅の時代と宗教

きできる、長寿、超能力、現実に叶わないことを宗教によつて叶えるという。欲望の充足を宗教によつて行おうとするわけです。民間信仰の場合にも強いものがあります。この神様をお祈りするとお金が儲かる。ガンに罹りたくないという老人のために、ガン切り不動尊というのがあります。病気で長い間床につくと家族に迷惑がかかるという人がある。そういう人のためにぼつくり寺というお寺もあります。ある意味で素朴な民間信仰であると思いますが、しかし、様々な形で宗教は人々に幻想を吹き込んでくる。

オウム真理教事件と並んで忘れられないのが神戸の小学生殺害事件です。神戸のある中学校の校門に小学生の男の子の頭を置き去りにして挑発的な犯行声明文を警察に送りつけていたという事件がございました。誰もが大人の犯行と思っていた。酒鬼薔薇聖斗という犯人は中学生であった。そのことが判明した時の衝撃は今でも忘れられません。丁度一年前の今日ですね。この日大谷大学の学生と私は一泊研修会に出でおりました。夜中の頃、たまたま放送を聞いた学生が駆け込んできて、「先生、犯人がわかりました。中学生です」。一瞬、座にいた皆が凍りついたような表情になつたのを思い出します。あの時、夜中に大風が吹いていたので生々しく蘇つてくるわけですが。

オウム真理教事件と酒鬼薔薇聖斗事件は表面的には何のつながりもないわけですが、しかし、幻想に酔つたということでは共通しているように思います。この神戸の少年は犯行メモの中で、「愛するバモイドオキ神様へ。僕は今十四歳です。そろそろ聖名をいただくために聖なる儀式を行う決意をしなければなりません」。バモイドオキとは何でしょうか。何か呪文のような、何の意味があるのかわからない。また聖なる儀式、「アングリを行わなければなりません」という。アングリはどういう意味なのかもわかりません。アングリは、アングリマーラを言つているのか。アングリマーラとはお糺迦様が生まれておいでになつた頃の盜賊で、人を千人殺したら救われると聞いて千人殺そうとして、自分の殺した人たちの指を首飾りにして巻いていた。千人目にお糺迦様に会つて仏教徒に改宗した。

ともあれこのアングリを一つの神様としてしています。作家で写真家の藤原信也という人がいますが、バモイドオキ神というのは彼の守護神であつたといつています。あるいはそうかもしれません。自分の行動を正当化するために神戸の少年は神様を必要としたわけです。この少年は学校という現実に入りきることができないで、自分の内部世界に閉じこもつて幻想の世界の主人公となつた。痛みも悲しみもわからない人になつたわけです。この少年はホラービデオ

## 幻滅の時代と宗教

を好んだようですが、それがいつのまにか現実に試してみるとり変わってきたようです。オウム真理教の人たちは神殿を富士山のすそ野に作って、そこにはヒンズー教のシバ神を祀つていたと報道されていた。バモイドオキ神にしろ、シバ神にしろ、自分の欲望というものを投影しているにすぎません。私はかつて三木清という哲学者が次のように述べたことを思い出します。

彼等が天や鬼神を畏れるのは自己のこの世における感性的な幸福を求めるためである。彼等は我愛、我慢のこころを離れず、我に執着している。……かくして迷信の根拠は我愛、我慢のこころであり、我を超越した天や鬼を拝している者は実は我を拝しているのである。

(三木清「親鸞」)

神を拝んでいると言つても実は自分を拝んでいるにすぎない。自分が神になつていると三木清は言うわけです。その時、自分以外の人間に對しては全く思いやりのかけらもなくなります。オウム真理教の人々は宗教を名乗りながら、なぜ無差別的な殺人に至つたのか。酒鬼薔薇聖斗と名告る少年もそうです。これにはいろいろな解釈ができると思いますが、彼らは宗教的主張のもとに多くの人々の命を奪つたわけであります。被害に会つた人々の苦しみに全く思いを働

かせることはできない。

村上春樹という作家は、サリン事件の被害者一人ひとりに面会してルポルタージュを書いています。地下鉄サリン事件の被害者にインタビューをした作品で「アンダーグラウンド」という分厚い本です。私は、「アンダーグラウンド」を読みながら、一人ひとりの大切な生活を踏みにじったオウムの人たちの独善的な行動に改めて怒りを覚えました。しかしながらそうなったのかを思い起さざるを得ません。

私の知っているある方で、東京大学の宗教学科に講師で行つておられる人がいますが、オウムの事件以来、宗教を研究しようとすると学生の数が減ったそうです。マインドコントロールといふことなどに象徴されるようなまがまがしい恐れが宗教というものに対しても出てきて、それが宗教学という学問を学生に選ばせることを躊躇させるのかもしれません。皆さん方はこの光華女子大学で学んでいるので宗教への一面的な拒否感はないかと思います。宗教教育ということをこちらでは、高校から大学に至るまで行つておられる。だから宗教について、一方的な偏見はないと思います。

ただ日本の公教育においては明治以来、宗教についての学習が排除されてきております。そ

## 幻滅の時代と宗教

のために学校の中で宗教ということをきちっと教えることがないわけであります。その一方、戦前は、神道的な教育が強制された。そういうことから健全な宗教への認識が日本人の中に育たなかつたということが言えるかと思います。いざ宗教に関心を持つようとすると、既成宗教はほとんど若い人たちには魅力を持たない。精神的な要求を持つて何か宗教を求めた時に、とんでもない宗教に入ってしまうことも出てくることがあるわけです。幻滅してそこからどう生きていったらしいのかということが宗教への大きな関心への転機になるわけですが、カルト的宗教の場合は、特にそうですが、新しい夢を見せようと/orするわけです。

### 三 仏教の立場

#### 幻滅の体験者としての祖師たち

ここで少し仏教についてお話を進めてみたいと思います。振り返ってみると、仏教の祖師たちは大変な幻滅の体験者であつたと言つていいかと思います。現実世界というものを鋭く見据えて、そこに幻が消えて、物事の赤裸々な姿が目の前に現れる。そういう体験をした人であ

つたと思います。たとえば、釈尊です。お釈迦様はインドのカピラ国に王子として生まれて何一つ不自由ない生活をしていた。しかし、心の晴れることができなかつた。おいしい食事、豊かな生活、美しい女性に取り囲まれながら幻滅感を味わつたわけです。釈尊の幻滅について、たとえば「大無量寿經」という経典はこう述べています。

現じて宮中、色味の間に処して、老・病・死を見て世の非常を悟る。国の財位を棄てて山に入りて道を学したまう。

お釈迦様の出家の動機についてこう述べています。老病死の現実のまえに楽しい生活は幻のようなものだ。幻をマーカと言います。人の目を惑わすもの、実体のないもの、私たちが実体だと思っているものは夢、幻のようなものだと、釈尊は悟るわけです。私たち日本人は「醉生夢死」という言葉を知っています。幻のようなものを実体だと思っている生き方を言います。そういうあり方にお釈迦様は警告を発したわけです。実体のない幻による生き方によらないで生きなさいと私たちにお釈迦様は教えられたわけです。

もう一人、私たちの身近なところで親鸞聖人がおられます。親鸞聖人という方も栄耀栄華の未来を生きるはずの人であつたのですが、その夢が破れた。親鸞聖人は貴族の出身だと言われ

## 幻滅の時代と宗教

ます。当然、貴族の華やかな生活が約束されていた。しかし、保元の乱、平治の乱、源平の戦い、転変極まりない無常の世の中に生きまして、親鸞聖人は出家するわけです。

しかあれば朝廷に仕えて霜雪をも戴き、射山に趨つて栄華をもひらくべかりしひとなれども、……九歳の春のころ、……髪髮を剃除したまいき。

(「親鸞伝絵」)

こういう人生を出発したわけであります。栄華の夢とは逆のコースを親鸞聖人は歩まなければならなかつた。晩年にこう言つています。

煩惱具足の凡夫・火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもつて、そらごとたわごと、まことあることなきに、ただ念佛のみぞまことにておわします。

(「歎異抄」後序)

親鸞聖人はこのように告白しております。

聖人は、平家の落ちていく姿を目のあたりにした。源氏にしても三代将軍で終わっています。二代目も三代目も暗殺によって滅んでいます。そういう時代に生きている。本当に現実によるべき、眞実によるべきものは何なのか。頼りない人生の中で何を求めて何を頼りにして生きていいたらいいか。何を拠り所にして生きていったらいいか。これを親鸞聖人は求められたわけです。

もう一人お名前を挙げさせていただきます。蓮如上人です。蓮如上人がお亡くなりになつたのが一四九九年ですので、今年が丁度滅後五百年です。八五歳の生涯でございました。この蓮如上人もまた幻滅の時代をくぐり抜けてきた方です。蓮如上人の時代も大変な時代です。比叡山の僧兵が横暴を極めております。寛正の飢饉から応仁の乱に至る激動期に、上人は、幻滅の悲哀感をなめつくした庶民と共に生きられたわけです。蓮如上人はこういうことを言つています。

それおもんみれば、人間はただ電光朝露の、ゆめまぼろしのあいだのたのしみぞかし。

(『御文』一帖目十一通)

私たちの一生はいろいろ楽しいことがあるけれども、ゆめまぼろしのようなものだ。もうひとつ。お葬式などで読ますが、こういう御文がございます。

それ、人間の浮生なる相をつらつら観するに、おおよそはかなきものは、この世の始中終、まぼろしのごとくなる一期なり。

(『御文』五帖十六通「白骨」)

人間の一生は浮草のようなものだ。それはまるで幻のようだというわけであります。有名な「白骨の御文」です。私たちが日頃親しんでいる御文は八十通ございます。これは蓮如上人の

## 幻滅の時代と宗教

ご門徒に当てたお手紙ですが、蓮如上人の目覚めた姿を私たちに教えております。特に、「白骨の御文」は有名です。お葬式に拝聴すると身に染まるものがあります。

岸田秀という心理学者がおります。彼は一切の現象はゆめまぼろしであるという「唯幻論」なる説を唱えております。仏教に近いなかなかユニークな説ですが、この方は、お経を聞いていても何を言つているのかわからぬけれども、この「白骨の御文」はよくわかると述べておられます。

釈尊にしても、親鸞聖人にとっても、蓮如上人にとっても、現実というのは夢幻のようなものである。そう説かれています。しかし、そうかと言つて、別の夢を人々に見せようとしたのか。決してそういうことはございません。釈尊は「道理を見なさい」と教えておられます。法(ダルマ)によりなさいと。また親鸞聖人は「ただ念佛のみぞまことでおわします」ということを教えておられます。蓮如上人は「たのむべきは弥陀如来なり」と人々に勧めております。

釈尊、親鸞、蓮如という祖師たちは決して仏教において別の夢を見たのではなくて、仏教によって幻滅の大地にしつかりと足を踏みしめて立つたのです。その点を私たちは誤解してはならないと思います。

幻滅の現実に投げ出されながら、それでもゆめまぼろしを追い続けようとするのが私たち人間の姿かもしれません。

### リアリズムの宗教としての仏教

仏教は現実を直視しなさいと教えてやみません。物事をありのままに見る。仏教では「如実知見」と言います。実の如く知見せよと言います。物事の表面的なものだけを見て、本質が見えなくなってしまうことが少くないわけですが、先入観とか偏見で、物事をありのままに見ることができない。私たちの目を疊らせてしまう。私たちに対して仏教はありのままに、そのままに物事を見なさいと教えてています。

この「如実知見」をもてと、人々に警告するのが仏教の教えであると思います。仏教は、リアリズムの宗教ということができるかも知れない。一つの例をあげます。あるところで通りがかりの人が尋ねる。

「お坊さま、こちらの方に女が通りませんでしたか」。答えて曰く。「い」を通ったひとが男だったか女だったかつて。私は知らないねえ。でもこのことは知っている。骨のかたまりがこ

## 幻滅の時代と宗教

の道を歩いているということは」(「清淨道論」)。

男にせよ女にせよ、皆、骨のかたまりなんだ。だから目を覚ませ、と。こういうことを古い仏典である「清淨道論」は、ある一節の中で説いております。このお坊さんは物事を鋭く見る目を持った人のようです。彼は外形の姿に幻惑されている男に目を覚ましなさいと説得してます。

### 仏教は虚無主義(ニヒリズム)か?

そういう意味において、仏教はリアリズムの宗教と言つてもいいかもしません。物事をリアルに見よという主張、リアリティを自覚せよという教えである。現実を自覚する。リアリゼーションという言葉があります。これは自覚と訳しますが、しかし、リアルなものを自分のところに現前させるわけです。リアルという言葉は現実です。現実性を自分の心の中に現前させることができます。リアリゼーションは、リアリティをリアルにリアライズするという意味がございます。それは私たちが持つてゐる偏見、夢想から目覚めることです。仏教は目覚めを大切にする思想です。

このアリズムのせいでしょうか、欧米では仏教はニヒリズムと誤解される場合がございます。蓮如上人の御遺忌法要が開かれたこの四月、外国の人々が観光客としてたくさん京都に来ましたが、この法要に何事かと思つて境内を訪れた人が少なくなつたようです。そういう人々の中に、仏教はニヒリズムではないかと質問した人もいるとお聞きしています。しかし、仏教はアリズムであるからと言つて現実をニヒルに見ていく思想ではございません。仏教、特に、浄土教では、現実はゆめまぼろしだけれども、その背後に真実の世界を見ていかないといけないと教えられます。

#### 四 〈希望の宗教〉としての浄土教

##### 「大無量寿經」という経典

たとえば、「大無量寿經」というお経の中で、こういう一節がござります。

【大無量寿經】にたくさんの菩薩が登場しますが、菩薩は

一切の法は、猶し夢・幻・響のごとしと覚了すれども、もうもろの妙願を満足して、必ず

## 幻滅の時代と宗教

是の如き刹さくを成せん。

(『大無量寿經』東方偈)

と願います。菩薩はニヒリズムの難闘を突破して、浄土の建立を願う。

諸法の性は、一切空無我なりと通達すれども、専ら浄仏土を求めて、必ず是の如き刹さくを成せん。

(同)

佛教は現実に目覚めるということを大切にするのですが、しかし現実に目覚めてニヒリズムに沈んでいくのではなく、そこから新しい希望に生きることを教えているわけです。そういう希望の教え、新しい希望、希望に生きよということを浄土教は説いている。決して佛教は虚無思想を説くものではない。希望の教えに目覚めて、そこを歩んでいく道に立たれたのが親鸞聖人です。

### 歴史の大河のなかに

親鸞聖人はこのように述べています。

弥陀の本願まことにおわしまさば、釈尊の説教、虚言なるべからず。仏説まことにおわしまさば、善導の御釈、虚言したもうべからず。善導の御釈まことならば、法然のおおせそ

ら」とならんや。法然のおおせまことならば、親鸞がもうすむね、またもって、むなしか  
るべからずそうろうか。詮ずるところ、愚身の信心におきてはかくのことし。

(「歎異抄」第二章)

悲しい幻滅の現実に生きながら、新しい希望を親鸞聖人は浄土の教えに見いだされるわけで  
す。浄土の教えという歴史の中に自ら生きていく、そういう生き方をされたのが親鸞聖人です。  
私たちは今、幻滅の時代のただ中にあります。さまざまな夢が幻のように消えております。  
共産主義や社会主義が行き詰った現在、資本主義というシステムはこれから二一世紀に入っ  
ていつもずっと続いていくと思いますが、このシステムは人間を欲望の虜にする。人間を人  
間以外のものにする、人間らしさを失わせるシステムです。畜生道へと落とすシステムと言  
つてもいいんですが、人間以外のもの、アニマルにする。欲望中心ですから欲望を満足させた  
い、自我中心が資本主義の経済のシステムである。二一世紀も人類が資本主義の経済システム  
を生きていくかぎり、ますます非人間的な姿に転落していくことが予想される。

それに対して親鸞聖人が見いだされた浄土教、真宗の教えによつて、私たちは生きていく道  
を示されるのではないかと思うのです。仏教、浄土教、そして真宗というものの意味を改めて

## 幻滅の時代と宗教

考へてみたいと思つております。皆さん方は光華女子学園という仏教の伝統に立つて教育が行  
われている大学で学ばれているわけですが、そのことの意味をお考へ下さればありがたいと思  
います。時間がまいましたので、私のお話をこれで終わらせていただきます。

—一九九八・六・二九—